

顕證像

この像は、近世における仁和寺の歴史における最重要人物の一人である 17 世紀の僧、顕證の死後につくられた肖像彫刻で、顕證の記念碑としての機能も果たしている。応仁の乱（1467～1477 年）の際に仁和寺はその大部分が焼かれ、その後も長年にわたって荒廃した状態のままだった。1634 年に徳川家光が京都を訪れた際、覚信入道が資金の提供と再建の許可を求め、これが受け入れられた。しかし、新たな建物の設計と建築の原動力となったのは顕證（1597～1678 年）であった。彼の日記は今日まで残されており、そこには設計やその他の意思決定における彼の監督ぶりの詳細が書き記されている。この日記には、計画があまりにも遅れてしまっているために、再建が不可能に終わってしまうのではないかという懸念までが記されている。彼の懸念にはもっともな部分もあった。1634 年に（覚信）入道が必要な資金は確保していたものの、建物の建設は 1640 年になるまで開始されず、ようやく完成したのは 1646 年になってからだったからである。このときにつくられた伽藍配置は、現在にいたるまでおおむね変わっていない。